

『かさね草紙』と能・狂言

田 口 和 夫

研究十二月往来 ^ 31 V に「木のへ殿の申ちやう」再考と題して小考をのせたが、ここでは、それ以外の『かさね草紙』所収話と能・狂言とのかわりをさぐりたい。該書は京都大学国語国文資料叢書の第三冊として越智美登子氏によって影印・翻刻・解説されている。

越智氏によれば本書は「中世以来民間に語り継がれてきた狂歌咄を集めた」（解説）ものであり、あるいは伊勢の神官層、もしくは一般御師階級に属する者が編者ではないか（『論集日本文学・日本語 4』所収、同氏論文）とされるものである。かかる雑話集と狂言との比較の必要性は、はやく北川忠彦氏によってとかれていたが、本書も能・狂言と素材を一にするものがあり、比較に有益なところがあるものであった。かわりの厚薄はあるが次にこれを一覽しておこう。（数字は越智氏の付された咄の番号である。）

1 高砂（我見ても）。7 野宮（かみ垣は）。

阿漕（物の名も）。11 井筒（くらへこし）。12 三輪（山田もる）。16 春栄（宮山木の）。69 隅田川（人の親の）。97 清経（さきの世に……なにのるらん）。

口能にも存在する場面を前提としたもの

29 玉葛（二本杉をたずねる）。81 誓願寺（西方へ日々にかよう）。

ハ能に直接かわりのあるもの

27 熊野。103 岩童・観世大夫。

二 狂言と素材を共通にするもの

3 木こり歌（35 も）。13 あかがり。24 木のへ殿の申ちやう。55 芥川。86 箕被（ただし冒頭のみ）

イは能で利用されている和歌がどれほどのひろがりをもって享受されているかをしめす一証となしうるが、すべてが能の場面を前提としているとはいえないものである。ロも能が前提とは確言できず、イと同様の意味で役立つものである。ハは確言できるものである。

27 「ぬし屋の弥兵衛と申人あり有時々ほに

あさの有をんなぬり物をあつらへて度々取に
来ればよめり 池田より使の人にさも似たり
それはあさかほ是はあさかほ」
能「熊野」をしらなければ、この狂歌のパ
ロデイぶりは成立しないであろう。

103 「むかし石山寺に法楽の御能ありけるに
岩とうといふは石山の大夫なりまくはんせ大
夫も来たりけり」岩童と観世大夫とが翁をま
う先後をあらそい「あふみのくにつかさ」が
両者の歌できめるとつげ、岩童「石山は岩と
うたひのほとけなり くはんせは時のかり名
なるへし」、観世大夫「南無大ひくはんせか
能をせぬならば ほとけのなをは何といわと
う」。「観世大夫かちになりにけり」

近江猿楽の岩童は『申楽談儀』に登場して
くる役者であるが、この名は「何代か続いた」
ものであったことが表章氏『能楽史新考（一）』
にとかれていて、いつの岩童かこの咄の
みでは不明である。ただ、岩童が石山寺の大
夫ハ樂頭だというのは、近江猿楽であること
からありうる事だろうし、観世座にこれが圧
倒されて、というのは中世末期ごろの様相と
しては納得がいくので、この咄はあながち架
空のものではなく、現実の能界のうごきを背
景として、狂言的構成にしたがって創作され
たものであったかと推量されるのである。

二 3・13・24 話については越智氏によっ

て狂言との共通性が指摘されており、3話と『多聞院日記』・『天正狂言本』とのかわりについて道歌から「教訓性を振り落して」狂歌咄、狂言へ変化する過程がとかれていた。

86話「朝夕歌道に心をかよは」す男とその女房との咄で、連歌の付句を北野天神におしえてもらう靈験譚となっている。これは24話について論じた小稿の方向、狂言は靈験譚をきりすてて現実に密着した所で創作されたとするものと共通ということができよう。

13話の「あかがり」では三首太郎冠者がよむ和歌の第一首「あかがりも春はこし路に帰れかし 冬こそあしのうらにすむとも」を猿丸大夫の歌として構成したものである。狂歌の創作される場としては咄よりも狂言の方が「あかがり」の登場する必然性がたかいたいえよう。それはまた55話についてもいえる事である。これと「芥川」とのかわりは越智氏の御指摘からもれている所である。

「芥川」は和泉流では『天理本』以来各時代の本があり、『狂言記』では「すねはじめ(脛蓋)」という。大藏流は『虎明本』にはあるもの大藏弥右衛門の享保九年書上には「珍敷狂言五番」のうちに数えられるようになっていた。驚流では『宝曆・名女川本』の「惣狂言目録」に名があげられているだけである。身体の不自由(ちんば、しやうが手)

を主たる素材とした後味のよくない狂言だが、台本の伝来からすれば京風の狂言といえようか。55話は次のようにすむ。

55 「津のくにの事なるにおとこ式人と風道つれしてけり一人はちんはなり」これをよんだ歌「津の国の難波入江のことながら あしのもとこそをかしかりけり」「あくた河にいたりぬその河にて後おとこ手水をつかひけりその手もとをみたりければてうかいなり」「あくた河ちりかきなかつ手もとこそ あしのもとより猶そおかしき」とよみてくり返し百へんもいひければてうかいはらをたて」る。人々はちんばがかいたとわらいた。

「てうかい」は『全国方言辞典』に手の不具なものを青森・秋田で「てかい」というとしるしているが、その類であろう。狂言諸本から共通要素をぬきだして比較すると、(1)社参であること(咄も「手水」としていているのであるいは社参であったか)。(2)まず川をわたること。(3)歌に小異があること(狂言諸本間にも小異あり)。(4)結末に相撲あるいは「はじかみ・しやうが」の言葉あらそいがあること、などの特徴が狂言にみられるが基本的には共通であり、場面と歌との緊密さは狂言の方がまさっている。これらはあるいは咄より狂言の方が先行しているのであろうか。

(一九八〇・三・三一)

▲たぐちかずお 静岡英和女学院短大・教授V